

襤褸(ぼろ)は着てても心は錦！

「襤褸(ぼろ)は着てても心は錦」。先日来校したある地域の方から語られた言葉だ。この表現は、着ているものは襤褸(ぼろ)でも、心の中は錦を着ているように気高いこと。見た目はみすぼらしくて冴えなくても、心は豊かであるという例えだ。人を外見だけで判断してはいけないという意味でもある。

水前寺清子という女性歌手が、昭和30年代に歌った「いっぽんどっこの唄」という当時ヒットした曲の歌い出だしのフレーズもこの言葉だった。

その地域の方が続けて言った。「山潟中学校の子どもたちは、実に生き生きと学校生活を送っていますが、それに比べて校舎やグラウンドは、あちこち古くなって傷んでいますね。」と。なるほど言い得て妙だと思った。子どもたちを褒めてくれたことはとても嬉しかったが。

既に知っての通り、山潟中学校は今年度で創立40周年を迎える。確かに校舎もグラウンドもガタがきていると見てとれる。本来なら、校舎をある程度広範囲に補修・修繕すべき、いわゆる「大規模改修」の時期をむかえているが、コロナの影響で繰り延べになってきた。来年度か再来年度にとりかかってもらえる予定である。

さて、山潟中学校は、40年前に石山中学校から分離した学校である。市内の小中学校では、150周年の山潟小は最も歴史が古い学校の一つだが、創立70数年の学校の割合が最も多く、昨年度40周年を迎えた桜が丘小とともに山潟中学校は若い学校の一つと言える。

みんなのお父さんやお母さんの中にも、この山潟中学校の卒業生はたくさんいるだろう。また、おじいちゃんおばあちゃん等の家族や親類の中には、学校用地の確保や、学校としての環境整備への協力を汗をかくてくれた人もいただろう。この山潟中誕生は、たくさんの人の理解と協力、関係者の皆さんの尽力や労苦があったおかげだと噛みしめながら、私たちは学校生活を送るべきだと考える。

人は節目の年をととても大切にする。みんなも自分の誕生日はうれしいだろうし、お祝いされて嫌な気分になる人はいないだろう。節目を大切にすることは、過去・現在・未来、つまり、これまでと今とこれからを大切にしようとする決意の表れだ。

そんな大切な節目である創立40周年を迎える今年、本来なら大々的にお祝いしたいところだが、このコロナ禍の状況も考えて、できるだけ簡素・質素に、でもすべての人の心に残る40周年を祝う企画を検討している。

学校が創立された40年前、この学校に通っていた子どもたちは、どんな自分の将来を思い描いていただろう。当時の保護者や地域の皆さんは、どんな子どもたちの未来の姿をこの山潟中に託したのだろうか。

まさか、今のようなコロナの時代の到来を予測した人はいないだろうが、学校に関係するすべての人の夢や希望をのせて、この山潟中は産声をあげたはずだ。

校舎は有形のもので、これから永遠に存在するはずはない。取り壊されたり、建て直されたり、どこかの場所に移転したり、その姿を未来永劫この場所に今の姿をとどめることはあり得ない。学校そのものの名前がなくなることだってないとは言い切れない。

しかし、そんな有形・無形の姿としての学校が存在しなくなっても、『山潟中学校』は、これからもずっとずっと君たちにとっての母なる学校、つまり「母校」として君たちの心に生き続けるはずだ。出会うべくして出会ったかけがえのない仲間と、同じ時代、同じ時間、同じ空間を生きて、同じ息吹を感じた者同士の絆として。

昨年度末までに、8062人の卒業生がこの山潟中を巣立っている。先輩達の思いや学校を支えてくれた人への感謝の思いを胸に、これからも、理想の学校をめざして、一人一人が確かな歴史の一步一步を踏みしめよう。

「集まり散じて人は変われど 仰ぐは同じき理想の光」

たとえこの先、校舎が朽ち果てようとも、学校の歴史に幕を閉じる事態になったとしても、同じ志をもち続けて生きていこう。それは、常に「人の心を大切にする」人間をめざすという大いなる目標に向かって生きるということである。

志を一つにすること、同じき理想の光を持ち続けること。それが「同窓」の証。そして、その無形の財産が、脈々と受け継がれ、根付き、自分自身の『心のふるさと』になること。それが「伝統」なり。

「伝統」は、決して歩んできた年月の長さではあらず、歩んできた人間たちの学校への思い入れと愛の強さなり。